說諧寂琴

人

俳諧寂栞巻之下

白雄坊選著　　拙堂増補

○[illegible]

其一　情の変

[illegible]人心

[illegible]

上の[illegible]

[illegible]

[illegible]

あと魂のみもつるかほるきく

見蜀帝魂といふものあるなるを
夏きくとてもとこそ一人の夜情なる

杜鵑　時鳥也　古今　秋　たて　公羽

見たるおすすめ第と詩を生ずるを　友
なるつのしるべ一る乃通情
除情見ゑめて一理第五
補　蒼門ちこそ
ら多ゑ侍よ　あるものるくたく
こそ出せるを絶雑とまて
七夜をたの第三味をくたく

第二理屈の素本

ふる多りの吟帆のみをよ抑哉
紫たるふ漢紙掛せる極奏
かるるぜと絹のかるるいを理屈
みちるるの

補

生んして春をふいの小茶　答　支考
男たるひと扶桑てくむたの山　如よ
理屈をいつるるるものも
理屈よみちるは韻あるあ
生るくて生を雅をたるる

第三たるくてるの素

候花ちるみちの夜百戸の柳哉

夕風ふかぬ秋吹こむの白菊

岩ぬりしる部屋あるとこそ見るとも

接時雨ふかぬ秋吹こむ入江哉

かゝ安ふるとこそ夕風ふかぬ時雨

しる彩物のさびしく体ふ感じ

かゝりの自然のるとぬきこのるこ

秋の雲尾上の杉よたなびき　其角

初月院の雲揺ふ揺ふ咲ふる　信徳

時雨をみりふ

補

六義云雅ふ云ふ歌とふ人ふ古今抄云

ふふふふふふのふふふ紙ふふふ

定家曰雅ふ思ふをふ

かふふふ

拾芸の日ふふふふふ　蘭更

あさうの雲ふふふふ　百明

おふ出ふ秋の雲初月院の二るの

時雨の物入ふふ容易ふふ後ふ

出ふ　拾芸葬の自然の雅ふ

さりとも此話を人も知らも哭まれ
ともに角信徳か句をとも紹介されたる
句なれハ初心の人にさとさむか也
こころを見て是の評有るなれハ
みのり人有し

甚だ世の中に浮さるる句の文

蝶飛ふとくふりきてくる野辺哉

今は情にも有るへし

此芝ハ木種も踏ぬ茶吉翁

是昔の花にも有るへし来すをを
えさるの花の方に立てるを出すする
次を春秋につきて是をしるす紙かる

てうのえ

昔々の友思ひ出す桜の事　翁

ある人曰此るものに浮きたきぬ為し
ふる碑昔日源氏須广の巻にね永く
はるく有る所植し花木のさくら
右の名に咲くものを云花の名うつろう
所なるによろしからす也咲ぬ
うちならさめことみ給ふりとこ
祖翁のる伊加女の上野故きのむ
中古の吟有りかえよつる花本の
又称りの子すさみ浮きれさき
所と編よみよのへうる

当時の句

きりぎすの声のはつかに聞ゆる　翁
世にふるも小野よりあぬ立月　尚白
夕ちどり捨の白い初てきこゆ　及肩
ぬれ縁に木陰あるる秋の雨　尚白
あるを世にしの時の絵の色　其角

四時乃月

清水のよりて生ける夏の月　許六
浦舟乃登る跡引る秋　月　古根

馬にのせてあるれる夕の月　懐雪
多の月条ちと門をたきぎ　野坡
つる人を生く待る月の雲す　牛残
名月や池をめぐりてよもすがら　翁
十六夜のよりを国のはるかに　〃
鞠の雲ちとき月のあるこそ　一伴
あるる猫のかけ生ける彩の月　丈草

四時の風

ちる柳風や水の中行舟の声　木導
青雲はくさむらに時や苗の色　嵐雪
小原女やみなふむかくへ常　園女
あくさしるまや蛇の衣かく秋の風　野青
こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

かくはいきの姿ながらのあはれ風情をのぶるしてあはさる時は
ちる秋にはきてゆのまのまきぬ
ことか

㊗補
初心の人題をはなれて先題の字にむきを

はいかいのはつ撰但古撰の頭なる
題にも向ふへしれと人ゟはなる題にて
も向ふまへば又深けれは題にしもはなれ
たるのなきにつらえさる題を初編
いまだぬべし君ゟみて下向を耻事と
已より先達の人ゟおもふはよの笑草
の人みな下拙のことのみもよろこびを知
るべし、いひさまにも向ふべしことに
おのてすこしも耻るのみ耻て聞え
さるも生涯の損と志すべしさて
こゝろえある題を深く記念して
題のさかりむ用ゐ也ゆるく丁寧
をはぶしてあふさるしるすその外
はいさるゝ事あるべくうす題の趣を
よくこゝろえさる也師の題に始めて
ころもいふものにたゝらむ
伝名抄云俊恵ふしは其初心の

頃のことにあり。結るあのとあの官かくさるのなのことも見分丁寧及後さるのえをそるひてかくもちあくそとせり

許六曰 舞るハ能の曲輪を能出して

作る人 曲輪の内をたるきこのもの内をあるハ天然

なるの月ハ人の内をあるきまる

時を等類ふるなく学ばして

功をあ〻〻得しも能よふきハ句成

みかく〻〻得しも能よふきを安ふりの

なれて初めの工夫かくもしところも也

よくみのあるなり

絶世ハ安ふしのるふ

安ふ安ふ安ふ

安ふ安ふ

其五當季の雪かを合を未詠のる

功安や野ハ美ふのの西あのを

まを抑やはをてぬるめる水の色

ものをはるをくるふをくくくかく

當季をこのけ合をくくくくくくん之

みのくくくくる當季のあひをるふよ

はるくきを峰や五月のあやをの　翁

すしはを行のを酢の香ひい　湖風

補 稲はするやをくて静ふ秋の人　伯先

くくくくまを詠のちくあくを

補

蝙蝠も出よ浮世の花に鳥　翁

〆鳴やさへづる鳴子の枯尾花　烏明

こゝろは他の事をあそばせたるなる

其六　古筆古写第に津かえる事也

梅くのくやこれもあらくて白よりも

清女枕草子の段の中
さくらてちり紀事の折にと舟のまへ
とあるをとあるを傾くうその
古歌をしつるをさしてたるもつるなれ

ぬ句法おほよ出されはるゝけ思ふを

闇の夜も栄を消して鳴ゝ郷　翁

又さまは古法の河泉の川風に
更清らかして郷たく形の
吾の声の五文字感さくさるの声の

補

草枕や露は人の身を踏まるを

書の色や鎌倉の秋の山もみす

おのるは夏山を秋来ふるとかけ鳴
鎌のとらへる家より生まれたるん

後の白ふ扇長の猫脚を山紙又をを
とりの絵より多く絵しそうる絵のもも
唐をとる絵しそふむつ多ふ〳〵旦
夕枠あり〳〵

蛍ちらちらふりの〳〵形つかき　暁臺

みちの蠅ちら毫をおはたてよろし　古嬋

いふ使ひや思ひ入多な山もふ　可都里

ちちちちみてちちへ〳〵

其七　髭の文字ふすする未孫の〳〵

多打ちちち関を誠ちり如〳〵

鶏頭や使ちちの鶏を標打の

かく赤ふるちちふ行をりてちる

みりちちち自然の鶏ふ一るの

中の幸ひも付ちを張る出り

ちちれふり〳〵を

ちちちちと打を鶏や女郎花　翁

枯のちる芝ふちのしや鶏頭花　万平

ちちちちを張ちちく〳〵

補　頭ちちちる文字ちちる事

角打や頭を天吞の牛の幸

[illegible]角とらふまより牛の字へうるこ

兼よりひのきて咲せよ天龍

[illegible]あけよてゝとうとうこ

夕雲[illegible]落ぬや鞍ヶ山

落るとゝのふの鶴とかゝるこ

[illegible]かゝて西[illegible]より月[illegible]

分入[illegible]川上[illegible]し花みる　重厚

人[illegible]火より上を桜ちる　白雄

[illegible]おま[illegible]の初[illegible]を眺ふ　樗良

夕[illegible]門さよ秋とあふふの　嘯山

柿寺も藪の中ゆ鳴[illegible]　士朗

文[illegible]かゝる[illegible]風[illegible]

[illegible]の[illegible]味つ[illegible]

其八作よすゝむ事

雪柳や水[illegible]人の浮[illegible]

[illegible]ち雲の再[illegible]と出る[illegible]中ゆ

[illegible]作よのこつ[illegible]

[illegible]作よ[illegible]や古人曰作よ[illegible]

[illegible]一作ふ刈一るのちゝ[illegible]

[illegible]

其九　二位[illegible]なる事

ぬきさしの羽やおの雁の
[illegible]又沼[illegible]珠や月今宵

ぬきさしの羽　声の羽
月を珠[illegible]又須[illegible]の
須よのこかつ[illegible]て紅をもつて除情と
せんや

其十　見ち立白の事

曲[illegible]や[illegible]も[illegible]細[illegible]
紅[illegible]や[illegible]を屏[illegible]立[illegible]
[illegible]
いる[illegible]かつ[illegible]
紅をもつて除情とせん

補

月[illegible]柄をさ[illegible]ふよ紅[illegible]扇哉　宗鑑
藻の[illegible]かつきの海人の鬢これ　胡及

[illegible]
さ[illegible]たふよさ　海人の[illegible]
[illegible]

姿情の韻おさふるに六義よりくる其の
体なるへし八雲御抄に其をたゝへ奇
なり或曰すこしにたる心の体をかくし
其の体にかゝへたる也

行くものゝみえても似せて二日の月　翁

月に柄をさしてうちわと見きてし
宗鑑か云ひたるをかくしてやされしと

甚土　ちよちんたなきさ句の友

梅しれや中にして澤る　十五日

せる衆月に似ひ出せし月や日ならのはぬ
なそのよく手本なきを老にみるへし

中にして澤る花とあるは十五日より出し
そとみなる中にして澤りしとあるそ
晴るよ似て出しさるるなるへし

嵯峨ひよき二日の月や花の櫻

二月二日なるへしいはさおほえし二月二日
なしいふさるさるゝあるまし

(補)或曰閏弥生のある年かさ二月二日に
初めてあるとものぬへしさうとしも
てきて使きあるゆゑそしまさとある
てんあしこみるへし

弱竹の木のや出すし二日の月　去来

十五日まんやむつきの古手買　之道

こゝろをよく味ひ讀して其
深みある所を知るべし

其十二　句のうらの事

小のさかのこれにうつるは接穂に
子細ありて其接穂も縁に續きに
ちからなし此句しひてるのさかひ

「我里に去りしと雨き時は
人の和景なき心もも

けうくろうさしのあししとなりの風雅に
こゝろしをそゆへき

山はくら世をむかふる接穂哉　猿雖

接の秋此ほどもきくや鐘の声　横几

補

古人曰発句のみ出んてうまきものは情を
まする短冊にあそめんてその意は
句しくにあまへ翁曰句うへの
人こゝろはへしと申しそ有道

眠る様な寺なき人の此まゝに　佛仙

くつの花をもみてはあまた雲の峰　蓼太

ゆきくれのかへてくはる月日一の秋　蕪村

大るのうやあて匠おの生るも地も底　見風

鶴みてて人よりて秋の雲　白雄

ひとすじの白のうすく紙ひろ

陣へ入落ぬ世うあと橋稚弧

あちすまの白作なり

たうちやや犬よみるるも雲ろ門

見行うしうも雲人のおみをヤ山て

るなをいてあを山

露沾産あく

西行の菴のあらむ菴の庭　翁

大つなる庭をよりみるよ比うみ

うのほうを小さ山みりの菴も

あんとやけうを半ろ人のおとて粉

うろうを半ろよりー卑下のる

ちうちしをうなのあちう

其十三　うきさ白乃事

擅木やうらんの秋をうを

みう川や菩みうをて菴かを

吟して志ろ白ー　うつうよ　菴うる

とあうふろ白ー　みるのみをを山の

行菴しきれ白をいるも一るをおさめんう

[illegible]

其十四　[illegible]於[illegible]の事

[illegible]

補　[illegible]

[illegible]蝶の[illegible]

ゆ[illegible]や[illegible]や[illegible]ハ[illegible]の[illegible]

[illegible]蝶の[illegible]をよく見て

[illegible]ハよし

蝶の舞[illegible]

補　[illegible]　闇指

[illegible]　藤白

[illegible]

其十五　一句の自他の事

[illegible]川[illegible]ハ[illegible]細代[illegible]

[illegible]命婦の[illegible]葉摘

[illegible]川[illegible]ハ自[illegible]細代[illegible]

他[illegible]命婦と[illegible]葉ハ[illegible]別[illegible]

川[illegible]ハ[illegible]命婦の[illegible]葉物と

[illegible]ハよし

あら海千海人の能こゝ

海人の能こゝ他あり　こゝの海人自あり

一るの自他あるなり

あゝ海よ海人を見るのこゝ

かゝなるふけゝるの一るの自他あり

むるゝるのこゝ

右義をひるゝかゝ鹿の角

志てひるの猪の中ある器の如

他流をかゝるるもるとは義の

るゝふ人を感ずもるとゝふ見

ゝ於おの自他のゝちゝふこと

補

きゝゝゝゝ猿志ひふゝ添乳うの

ある正法の紙砂集ふけるを出すの

志ゝも宗ゝなるゝ紙もすゝ人のるゝを

ゝゝよの女の自のるゝふ綸ゝ

男のるゝふ添乳ゝこれを他ゝ

ゝるゝるとゝゝ猿志ひふを見ゝを

自他ゝ日ゝゝ人ゝるゝ者ゝ人の師ゝ

みゝつゝゝ和尚曰一宗の師ゝ

ゝもゝゝゝゝ一るの形をも解

せゝと人の師と形るゝふれゝ教ゝ

己を形ゝてゝるゝの事ゝの

或曰初の門人の義るをゝゝ

ゝゝゝ者ゝを見ゝ時ゝ志角ゝ

門士の新吟を新ゝれゝ新ゝ宗誠

の妹と形ゝゝゝゝれゝ門ゝる

絹布に西従き人のかたを御ある
者のうちかくのごときは師もとより
其を差とりしたかふに師はそのこころ者
存じとまかせて縫そとすし其師の者の
判を婦人によまて獨学因循なり
よく心得べし

其十六　かく人に應せられる句のこと

縫針の家に手に依る夜窓乱
かくふるは縫の女の目乃るなり

縫針の着き穂の於ゆ
かく縫は縫ふて出してもよろ細ふし

のほうきてては雲る紀にほうの

盲膳をつゝんとてもかくふるは世の物
了たる綾の女の以にむしきとんは
むすべんぬ

おもとに女くそら耳も羽時　望一
盲人の者をみりへし

之羽紙の同に志有る葉の羽　園女
女の常をとりてかるし

無小よう人を其志のる精進哉　落梧
長良川の咲々して花の川の名を

行むかるこ行きるへ〜旅人このゝふ
ゐをいひ出てそいてそ人歎きつゝやも
きるゝ〜静なる巫の罪つ〜るゝとかゝち
半るそさゝまあそれむ多〜

元りや家よ殯の方ゝ佛ん　去来

殯ゝはうんちあゝん有て　〃

秋ゝや白木の弓ふ張そらむ　〃

老民者と指やさゝん玉敷　〃

見去来四ゝかゝふるのあ乾
みてよ〜あるゝのゝふの多なふ
多〜

簑虫の音を聞よ来て此の庵　翁

ちゝ毎ゝ深半ゝむ行春の秋　〃

ゝ〜簑虫ゝゝ春ん世　桂　〃

殯者の当をみのゝ多〜

ちる花を南北の孫殖行と久礼　守武

集ゝ来朝のるゝと玉せり
其角曰唯一の神祇ゆゝて行ゝの
にくゝゝの多ゝ只嘆ゝ〜〜
嗚呼ゝゝちゝ
たゝゝ

守武辞世

「ちりても又ゆく末も秋深し
岸の玉川　この句
それなきてふみを

補

宗祇法師二十五禁好のはしめにも
雑るの事　禁るの事
それゆゑをさゝるの事
ともあまつ自他のことちかひため
みるを以出すの事右ちかのる為し
凶自他のみの人倫のことあらく欲
その本ある獣ニ対しても言ふことろを
のゝふしさえて
言ふそれも　言ふことなき　咲き　ちらき
撓ゑ　このさ　ありもて　ゆけ

我とあるを皆さらしあるの下知の
ことば是非なるものゝ魂をのこる
のあはしくとなり

遊ひ出よかひ余の下の垣の色　翁
たやくさけ九月もちりし葉の雲、
こゝろみてもしるへし

補

禁句の事

岸の火の人なき硯ちえうつり
ける言到不到句くなきやの稀火
我く岸の火朝硯ちあのくろのる

ものなるべきにしるさゝゆゑを家の
少の墓にうつるとのべきことゆる
樹のあり

岩の火影人なほ孤をよう
かゝあゝゝ樹ふるの孤をのゝうん
まへて分身をかゝるゝ皆樹ふるこ
をゝ孤をおしてちるへし

補 不易流行の事

不易

行なるゝ所を問ふ人に　其角

流行

変なるゝ所ゝ人に降る梅の雨　丶

不易

杉の苔の雪に流るゝ苔の蛙　支考

流行

年〳〵や陸奥に降るゝひゝ初時雨　丶

不易

陸奥より内を百姓の袷の哀　乙由

流行

結構不日終時ハ[illegible]　乙由

不易

[illegible]　柳居

流行

梅ちるや仏打ぬ仏師ハ

不易

卯の華よ尺八さえて[illegible]　鳥酔

流行

大井川帖も[illegible]ハ

[illegible]　貞室

不易と流行とハ[illegible]

不易を[illegible]

[illegible]

[illegible]の山　貞室

朝夕の人も[illegible]　宗因

月[illegible]須磨の浦　貞徳

[illegible]人[illegible]を祖翁より先の英傑[illegible]

流行をなまとい[illegible]

不易のみを述[illegible]

秋[illegible]と[illegible]結[illegible]　存義

身を捨よのなる中あの高雅　平砂

ここちつの人くふるかより他流を
聞つることとものふくるの吟もあと
夏山のしかくさや

鳥もてのふあえての森や春の雨　長翠

世すすえの師匠の梅もあまつる　葛三

細道やけかもなく椿さく　其堂

芹摘て芹田打くまの面　巣兆

瓜とまのよふねはひなる更衣　瓦雨

雑穀合よりけて出くり夕揚　雨塘

花を折るたいくくしかくくの　成美

霧ふくるや朝の方吾の面さんの　乙二

よくふるの藤を見ん来る馬の　恒丸

ふるの時雨もみかるる五月哉　完来

三事ハ是人の笑ふの春の金　岳軒

実の丁ちはさてをりをおる　青蘿

二日月浪のはのあハ形のきく　羅城

新鮎のひやくとさく切招れ　士朗

望誉とおとおりつるれて遠を　大江丸

夕ちの迫江の孤舟　友國

朝雲や田蓑の雲の浮うき秋　瑞馬

秋雲の戸ゐ出ぬとはる赤の紅　井眉

秋ちらぬ物や西月しる小田の屋　升六

青柳やよくも若ちらすし　月居

秋をう殺む雲の海さよ海る山　猿左

自てよひ流ふ力松の水百里　梅年

蓮の茎の抜ゝ陸とふや梅西の　土卯

多ひよりこゝ秋の風山あゝの月　定雅

鶯の巣の卵剝らんなきよりる　蒼虬

よの紅ゝ雲多仮蔵る月あゝ　其成

雲の紅ゝ雲ちる秋よりかゝひ雲　丈左

猫の恋多ゝ多物も形ゝ恋ゝの　樗堂

そゝろそゝや高ゝ書を又るん地　道彦

不易ゝ編ゝ流りを踏ふ
流りゝ編ゝ流りのゝ不易ゝ
蛙ひ飛ゝ古ゝ池の水音
芭蕉の道風形のゝ不易ゝ
流りを巣ゝ仏ゝ世の
俗者ゝ多ゝ不易ゝ流り

[illegible]

○

あの風をひのるる[illegible]んの秋のあわと　誠拙禪師

角田川あとの吟[illegible]の恵然禅寺
[illegible]の[illegible]を[illegible]と[illegible]
あてこそを[illegible]

俳諧寂栞巻之下　終

俳諧寂栞自外

十五の哉の事

[illegible]

[illegible]の別[illegible]なり　[illegible]
[illegible]

[illegible]

野中[illegible]
[illegible]

[illegible]美の哉　蓮　[illegible]の中なる法華経

[illegible]

嘆息の[illegible]　牛　[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]　黄菖蒲　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]の[illegible]　稲　乃　秋

[illegible]

[illegible]　[illegible]風の[illegible]なる野[illegible]

[illegible]

[illegible]　月清し　今宵は満るこの[illegible]

[illegible]

むらさきぶくさ
みわ

ちらしの牙い行ゆよ柳ふる武
うきをふ松かを梅のひろい
そのみさ山のを今して志ふ
たくぶ ひくぶ かそぶ
ふる みむぶ ゆむぶ
ろぶ さまぶ
をてウクスツヌフムユルウよりけく
れい皆うきぶ也ゆよも思つぶい これ
哥みもろ歌のぶとらつみや先する
くたのくく
美葉せ くれも なくぶ紙おりつぶ

あくさをあてもも自得の人ふ待い
はうふ
社堂曰うき載みても一るのみさ山の
よきふきうきうたろ

ろひくさふあろ志を掛る巨雄ぶ
門の木よ小るゆうぶ小春ぶ
ここきくのるきくよりあてきくくぶ
かふくよ首きをまたるうたくし

武士のきくなくさん ひくくさ
ゆくたくさむへきこと 舞あきく人
もうあのこふと

言葉ふを切て
志のほくふ

志ひとは舞人人もこれ
ゆくたくさむへきこと 舞あきく人
もうあのこふと

んみてきこえざるかたちあるし

句中より詞を切るは

初春の遠里牛のなき日哉

傘張の眠りを胡蝶の居どころは

遠里牛 眠りを胡蝶とはくるをなるゝ一るのみさまりをば吟じてしるべし

吟のやを捨るは

蚊の嘴をあるやとかんぜ淵瀬は

叢の露ふむ雲や鳥の雨

吟じてしるべし

たとへのぎ

梅柳嘘よりしれは女この躰

嘘といふ字をみてはみのひかりやうにいふ筋を
かさねしなり

拙堂曰鐃舌録に古写本にあると続て

梅柳さもあらば女哉と出せしより

梅柳をもあれと女にたとへたるにきこえて
きもと縁をしへて人をたちまちにけり
さ延宝天和の吟なること
紫の一本に延宝天和の頃の風俗を
よく述てありさるを其時代の人流に
かして掛るん遊山に出るみちを掛るん衣装
つらく俳諧なる形容をなし
出つるなりの途中にてみなとふるるひ
そるころさも傘も作りて俳諧衣装
をきえてる中にみる湯あがり掛る紙
そこととせしところをみなとみへ木くの
梅がしちりき陽辛きに志ることに常

なのころまてしるし尾花ハ佳運なる衣裳
をかけたる人男帯にかえたるらしい人皇
とるまきを流せし太夫は流行女も赤
縮緬をこのみて揚らん遊里山よそれさま
みて出しに売るるをおもり梅咲柳
みとり移し衣て流行る名えんや女
なるのさ流行にて加らんよ出るなんと
その世のさまも今の世のさまみとる
きらめきたる寿暦堂先生の独語
にも世の中の風俗のかはれるさまは
さまで著しからぬの名聞利欲を
嫌ざるんはたしかに今かわらる孫とも風俗
五十余年も同し姿にあらす但律
先生論語徴の例に倣いて延宝
天和の風俗をつぶさにあらはし今より
向後云れ来りて後世のための文字
作りえてみれハ千百年の後十七字

三和かゝりておもしろ一字かへずそのまゝの
よろにてもかく明日より又日暦を
以下にても一句の流行よりさき有哉とある
有りかきらるゝ為ニ情を入るゝへくしを
饒舌録といへる書ハ絢の玉緒といへる
書のまねえをあくまでし出かそその
まゝ繁昌のよにもえハ理にあたはせし
出なたり絢の玉緒を后の和歌者流
もあまり刻やさらにかえりて流行せしとき
さるむかしんや

安永七とせ

乾坤の絆となる人のこころ哉

寿をまちて瀬よりも廉の思ひかな

人のこころは何くとも草木も禽獣ともすべて

そのさま紙多ようけてさて発かし
きらめ哉なり自他のさかち海さきを
安しよくよくかきへし

三段の句　哀ちかうきをちりは秋来ぬ哉

吟して見る人しきくくかゝる句は一句
の治なるへし

名所の句　并や哉

首尾やさみの海の山は月夜哉

道潅や苦世紙ほろひし哉

名所よのそこそや句をはるかすへし
うらうらくくいつすあらうつろえ
承りしてつらふ魚母なし絵るの
さくさのふうろをかりけりて本そつの字

ふちうく紙へふる事なりむ初心の好む
所なり

夕暮や秋を聞くの難句

名所のや句自得の人をはけるもきまり
解きるし難は教ゆへして百生子生
ちかくきるくあれと先をきつ句ふ
そくひとつの走盧茶ありは以くの
ふやとうさひて秋への所の字ふ
紙のちうくをのさらきとしむ祖翁
のかよ来ふるゝひ出せる人ふしと
きつくへし

十五の哉絵るの題ふそ志ありへし

首尾の句

鶯き山鶴鳴てん志く哉

拾遺　しの原の柳の歌

[illegible]

五月のふ[illegible]

[illegible]

時雨降　小傘さしはくるかの[illegible]

小傘[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕のの心を貫切の古くしみを
あ〜よ吟し〜て古くしかくの心の
心をのぶ〜ふ〜貫切よなを安し
嘆息ぶ　稀代の歌　これい古くまる
あ〜て貫切よはゆめ〜ふ〜ゆ多し

稀代歌

ひ〜ひなくも松金義を結ぶ
風招音の日〜よ〜〜はゆい
古くの所ふ屋をのをを挿ぶ
稀のて　稀の少　ひと切多
ゆもあ〜稀といひ古ろ詞みをゆる
て〜を〜かゆ多ゆ名ひ〜て〜ゆ吟し
てゆる多〜

南天ふ幕さくのて吟て段歌
雪吟ひ〜一人と古くとひのふ
花ひ〜木ふ古ふみひ〜いまゆ
ふ〜の如〜さをのて吟　古くと別ん
ゆりへはまちひとをそのはく〜をは
と〜ひ古よのつのふ　そ〜ゆ抑ぶ
ゆのやたりきひと〜ひく稀のトテハ
ひこよりひく〜ひ白〜ふゆまし

稀の子居て異命の弦の情吟ぶ
強ふ古ゆよむ〜ゆ古ゆすゆ

かくのごとくよる 分の雁 たをいく
いつさ いくそ まくうえひ捨て
ふくさ 笛くさを吟して さるふくし

分るの卵 あ蔵 野 松の蔭

分くらの京の紙あとらん字をうち書て
さて京と笛くさを

分の乃本の芦 さらす白ひく

分と分して蔵のもとと 鶏ひ色
て京と笛くさ 情鈴 ふくさの弟
別なるの 吟して さるふくし

十五のやの乃事

うくひすや 柳のしろ藪のお
鶯のやそ ふるそふ 切忘や
情鈴やの手くひと

治定のや 岡井やまろ国のうへ乃雪の陰
京中や 芝のうちやのたくへいひさめ
くるまり

新笑のや ぬさ山ろや大かそもの初り新
いつあも 稀さくし

嘆息のや　於とろひや山蔦の吟あて海苔の松

山のかも嘆きたく

笠掛の蓑紙めくるや初時雨

拙堂曰北枝らの句あり和義の蓑をうちかたぶけて門ふ
ちをおなじくふ笠を掛て蓑紙をえくるる
のるへをうけて山をうけて蓑紙をえくるる
やと嘆息しるるやの文字のうしきの
猶のやうとんるるまさまとて古人の
をるるみても当時の人乃吟あても
嘆息称を治定まと程くくそ
ふりてえんるるる

郭のや　芽莫葉よゆ乎とや伊勢の初夜

捨や

吟しくてきるるる

年の暮女の眼鏡さらすや

かくのてくよりをふ蓑なる立文字の紙
居るるくよりきふきくろあり

花少し実は皆花もの子孫こや

これうとひ捨るやなりよりをふ紫
あきとと皆くいふるるみてきくく

ことりと居て木の実はの実ひくえ　たや

ここを称うひ捨るやあり　よりをふ紫
あきとと中　七文字のみてをふ紫あと
みてきるふるるる

小松のや　水くさや蟬も鳴ぬる深草

吟じて志賀の

あくさのや　遠里の歩みや菓子や朝がほ

みぶしものをみしあくてらみなり

夜や秋や海へ捨るや時雨

見たくさのやすゝ洗て一ぱいの酒を吟じて

はくさをあるとの一ぱいの酒を吟じて

志賀の人しむ初ものとしてをりへ

ゆきを

さらむや　はつの月　きく立ものやあくさの檜笠

ふるや　けぬ　さらんや　蝶のたくひかな

宮家々や　宮家の瓦さこの〳〵ぬよし

おりせらし　もしもしらのやあさと

志賀の人し

口合のや　こゝ義や世の様ふ法ゆゑ古盃

吟じて志賀へ口合のや切なめる義

ある方へかさねとけるい一抹の法の

口合のやとるよりて出せてく

ものの口合をさらんこうしのや

吟じて志賀へ

紀ひのや　人や来し　柳さ新さ香乃宝

吟して志るべ　ちやぬる　あやぬる
のゝさゝひ　ひかり　うらみ　さえ　の二句
あさ　ゆふ　のみもむ　さゝ　さゝ　さえ　あり
きやゝ　きゝ　ゆふ　やわらかゝ　ゆ
君や　ゆ　きゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ふゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

はつ　春ふかや　名も知ぬ山の字は霞
吟して志るべ

たゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
旅をして見しやうき世の猿掛
吟して志るべ　そゝむやとよく似て
てのほう形容

こゝや　里は武の間を人とゝやゝ
ゆ　ゆ

見回ひのけ　ふ　ふ　ふ
志るへ

腰のや　黄の花を水にそゝぐ新や茶屋娘

鶯のやよく泊る　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
よの字まか　其中ハ後のやハいよく
そふかゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゝて志ふ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
あり　多く後のやあるし十五のや
後を味ひて志ふ

やとりして捨也ゆり　行年や祝ふ白髪をかくし来て
年の涙や特川ハ見ふ昔あり
のゝも水ゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あしたの雲　[illegible]

[illegible]

[illegible]

雨の[illegible]菓子とおもひそのものをみのふ[illegible]

炭[illegible]のものゝ書[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

いゝ[illegible]

[illegible]

五合帳より[illegible]もあるふ[illegible]沖の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

石女の[illegible]

[illegible]

[illegible]

行基江の人とおもふ計ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初生葉にもてはやされむ輪もせん
君火をもよそるの見せん玉たゝめ
おもひもやや多異恩ふ面の内
鴨たちぬ大ふ形やかゝれ雁ん

これふの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]自他の[illegible]ち
[illegible]はゆ[illegible]
拙堂曰負外[illegible]
[illegible]初云の

少な古人の[illegible]解[illegible]階梯
[illegible]
[illegible]

俳諧寂栞貞外 大尾

文化九年壬申皐月刻成

通油町
鶴屋喜右エ門

本石町
西村源六　全志

田所町
鶴屋金助　雕

江戸書賈